



東日本大震災被災地における
第5回ボランティア活動報告
「絆・ベルリン」

Dr. Frank Brose

絆・ベルリン副会長

2014年4月21日から5月3日まで、「絆・ベルリン」は5回目のボランティア活動を実施しました。今回は参加者は12人（5人のドイツ人と7人の日本人）になりました。4月20日に、7人の絆・メンバーはベルリンからイスタンブールを経て東京に飛び、21日は、市川に住んでいる日本人の絆・メンバーの家に一晩泊まりました。

次の日に8人がメンバーの車とレンタカー二台で大船渡に行きました。私達の労働の場所は辺ぴなところにあったので、公共交通機関では行けませんでしたので、マイクロバスを借りなければなりませんでした。他のメンバーはバスか電車で一人で大船渡へやって来ました。

今回の旅行の活動の重点は大槌のドロノキ・プロジェクトの植樹運動や2回目の「翼」プロジェクトの参加の面接、遠野市でメガソーラの商談、陸前高田市副市長訪問、ベルリン・ハウス訪問にありました。そして、いろいろなところでボランティア活動しました。ベルリン・ハウスと長洞仮設住宅の公民館、陸前高田にある「りく・カフェ」でコンサートを催しました。

これから以下に、訪ねたところの現在の状況と行われたボランティア活動について報告します。

1) 陸前高田市

陸前高田市は、東日本大震災による津波で一番広範囲に及ぶ被害が出ました。津波は海岸の高田松原から内陸まで約8キロ内陸まで来た形跡がありました。海岸では津波の高さは15～18メートルでした。住宅地面積の43%が被害を受けました。住民の8%（約3300人）が亡くなりました。

市庁舎も全滅しました。そのとき68%の市職員ら（＝111人）が亡くなりました。その3か月間後に、近くにある高台に仮市庁舎が建てられました。

5月24日に、陸前高田市の久保田崇副市長はその仮市庁舎で私達に現在の復興状況について教えてくれました。



陸前高田市の仮市庁舎

津波から守るために、都市行政は新しい「高田土地・今泉土地利用計画」を策定しました。基本は多重防御型による安全な町作りです。



図の凡例: 高田土地・今泉土地利用計画（平成25年11月）「簡約した凡例: 浅青緑色 = 高田松原津波復興祈念公園、緑色 = 緑地、その他の公園と緑地、黄色とオレンジ色 = 住居地域、褐色 = 混地域、公立、青色と紫色 = 工業地域、商業地域

現在、陸前高田市はその土地利用計画に基づいて、すっかり変わった形で復興中です。

絶対低地には、絶対に人間が住んではいけないと説明されています。大まかに言えば、海拔10～12メートル以下の土地は住宅地域として危険な箇所です。

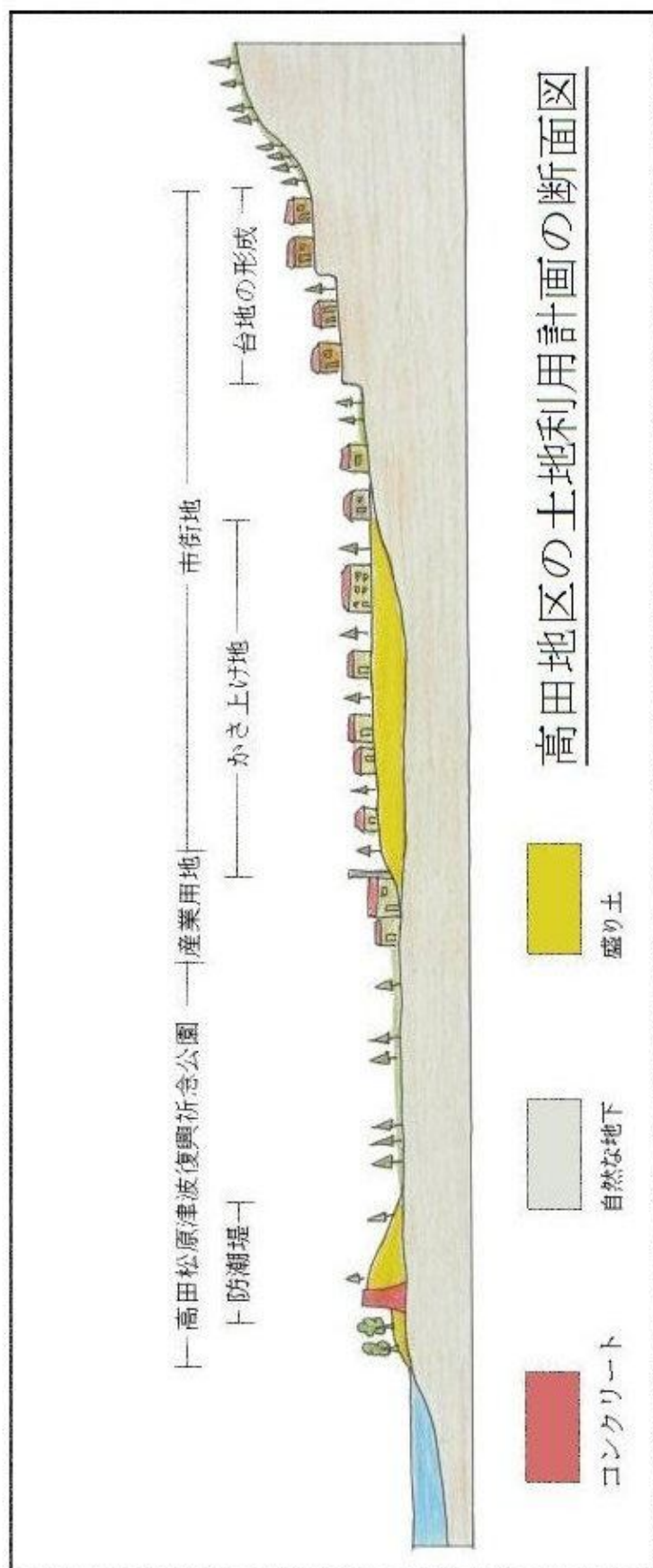
防潮堤を海拔5・5メートルから12・5メートルに7メートルかさ上げします。

防潮堤の海に面した側には松原を植える予定をしています。防潮堤の陸に面した側には幅500メートルの「津波復興祈念公園」が作られます。

津波復興祈念公園の裏手に工業と商業、混在地域が隣接します。隣接地では大規模に土が海拔10メートル以上の高さに積み上げられます。

そのかさ上げ地では主として住宅と公共施設を建てることが予定されています。

そして、150ヵ所の小高い市街化区域で新しい家が計画されています。たとえば、陸前高田市の仮市庁舎のそばには300人の在住者に公団が建てられています。国有地または私有地です。



高田地区の土地利用計画の断面図（断面図は一定の縮尺で描かれていません）
防潮堤の高さは12.5mで、かさ上げ地の高さは10～12mです。情報源は都市行政です。

しかし、大規模なかさ上げ地について、砂の輸送は大問題になりました。予備調査によると膨大な量の土砂をダンプトラックで運ぶと10年かかるそうです。

それで、陸前高田の都市行政は市長の戸羽 太の指導で別の方法を取りました。ダンプトラックで運んだら長期間かかりますが、ベルトコンベアだと約1年半に短縮可能だということに気が付きました。

そうすると、たくさんのダンプの運行が減り交通事故や渋滞も削減できます。多くの点で、本当に名案でした。

現在、気仙川の向こう側の今泉地区の山が切り崩されています。その山には、8基の粉碎機が設置されています。高さ120メートルのこの山を40メートルになるまでガリガリと堀削・粉碎し、岩と土砂をベルトコンベアで高田地区に運びます。



そして、そこで削り取られた土は巨大ベルトコンベアで輸送し、陸前高田の中心部を10メートルの高さにかさ上げしていきます。工事現場は、本当に壮観です。

ちなみに、陸前高田の巨大ベルトコンベアは神戸空港の建築に使われた方法から想を得ました。人工島ポートアイランドと神戸空港を建てるために、神戸の隣にある山が切り崩されていました。土砂は、山から建設現場まで長14.5キロメートルに及ぶベルトコンベアで運ばれました。

ベルトコンベア機の着工は今年の3月の下旬でした。それから1ヶ月後にベルトコンベア・システムの長さは1キロメートルまでのびました。7月までに、長さが3キロメートルに及ぶそうです。

工事を担当する共同企業体によると、コンベヤーベルトは、山を削る高台造成で発生見込みの約780万立方メートルの土砂を別の場所の盛り土に利用するため、1

日当たり約2万立方メートルを搬出します。それで、作業は2015年5月までに完了する予定です。



いくつかの配給点を使って土砂がいろいろなところに配られることができます。



気仙川に掛かっているベルトコンベヤー専用吊り橋は「希望のかけ橋」と命名されました。二つの主塔の高さは47メートルで、塔柱間は220メートルです。



この巨大ベルトコンベアを、奇跡の一本松と並ぶ「陸前高田の新名所」と言う人もいますが、一本松は間もなくここを去らなければならないように見えるのでアンビバレントな感情がここに浮かびました。もちろん、復興の喜びはノスタルジックな響きを上回るべきです。

たくさんの陸前高田の市民がまだ仮設住宅にすんでいます。最初は仮設住宅の基本滞在期間は、2年間と予定されましたが、多くの人にとっては4年間以上になるそうです。時とともに増大する社会的諸問題を解決するために、都市行政は今まで11回のタウンミーティング「town meeting」を行なってきました。

仮設住宅の住民の20パーセントは自分の家を建てたいと言っています。80パーセントは公営住宅のアパートに住む予定です。高齢人口が多いので、バリアフリーの建物が予定されています。個人住宅建設には500万円から1000万円までの国庫補助を受けることができます。津波で被害を受けた木から地元の木材を使用すると、最大の国庫補助を得ることができます。

公営住宅について、主要な問題は土地の譲り受けです。2000人の地主の約90パーセントが売却に賛成しました。しかし、たくさんの土地所有者や指定された相続人も死亡しました。そのような場合の迷宮入りの相続請求権が大きな問題をもたらしているのです、長い時間がかかります。

陸前高田市では現在は災害前より失業率が下がっています。しかし、たいてい復興計画の枠内での一時的な作業です。別々の職業部門が徐々上昇しています。たとえば、ワカメ生産は70～80パーセントに達成されています。

比較的近い将来、超近代的温室での野菜栽培が大々的に予定されています。町のはずれに、最初の温室が落成しました。それは「環境未来都市・プログラム」の一部です。（2010年6月の「11の環境未来都市」の政府による決定があります。2012年1月18日に、被災地6都市と、その他の5都市が「環境未来都市」に指定されました。岩手県では陸前高田市と大船渡市と住田町が選ばれています。

「気仙広域環境未来都市の2市1町」と呼ばれています。目標は人間らしい町づくりです。省エネやハイテクノロジーなどのいろいろなプロジェクトが計画中です。住民の平均年齢が高いので、高齢者に優しい町にする予定です。ですから、高齢者にやさしい近距離交通手段を敷いて、「コンパクトシティ」を創設するつもりです。しかし、今まで実現率が少しです。)

別の焦点は、「災害学習 (disaster learning)」での特別な観光プログラムの構築です。津波の影響を説明ために、沿岸に沿っての航行も行われています。記念地の建設も計画されています。

- ボランティア活動

2013年の春と比較すると今年の春は陸前高田のボランティア・センターの様子が一変しました。

去年、毎日開かれていたボランティアセンターは活気に溢れていました。駐車場では、いろいろな日本の町から来たバスがたくさんとまっていた。今回はボランティアセンターにはほとんどだれもいませんでした。しだいに単純労働の量が減っているの、ボランティアにはあまり仕事がありません。それは本当に復興の前触れです。瓦礫がすべて撤去された後、津波の3年後に復興が始まりました。そして、いちだんと適格な労働力と専門工が必要になっています。

しかし、漁民と海藻生産者とをサポートするために、市政はボランティアを斡旋しています。漁民はたいがい道具を無くし、今でも苦しい生活をしています。



4月23日に、絆・メンバーもそのようなボランティア活動をしました。ワカメ生産者の仕事を助けました。男たちはワカメを大きな桶の中で煮ました。女は同じ時にワカメの硬い茎を切りました。

- りくカフェ

4月25日に、ボランティア活動の後で、陸前高田市の小高い所で建てられた「りくカフェ」に行きました。りくカフェは、2012年1月に仮設の建築物で開店されました。

目的は陸前高田市の地域に憩いの場をつくることでした。その時から本当に地域の生活を支える拠点として大きく成長してきました。現在、その拠点には、いろいろな利用方法があります。コーヒーを飲むだけでなく、スタッフと会話をしたり、買ったお弁当やパンをその場で食べたり、インターネットが使えるので、仕事もできます。カフェの営業時間外には、ミーティングやイベントの会場として利用することができます。そして、コンサートや様々なイベントを不定期で開催しています。

4月30日に絆・ベルリンもりくカフェでコンサートを催しました。

フラウケ・トゥヴォルクが歌い、フランク・バイヤーがギターをひきました。

4月25日はコンサートの準備でした。

りくカフェの運営者は鵜浦 淳子さんです。



ドイツに住んでいる鵜浦さん一家の一員は絆・ベルリンをサポートしました。去年、ニュルンベルクで共同のチャリティー・バザーを行ないました。

2) 陸前高田・上長部

4月24日に、陸前高田市・上長部に行きました。まず、津波の被災者に対して1分間の黙祷を捧げました。絆の果樹園を見た後、ベルリンハウスと命名された新しい上長部の公民館で地域のみなさんとの交流会と、コンサートを催しました。昼に、上長部のお母様方が私たちに美味しい食事を用意してくださいました。

- 絆の果樹園

大災害の記憶として、また、東北復興の象徴として、2012年の秋に、絆・ベルリンは上長部公民館の近くの敷地にリンゴの果樹園を造りました。厳しい冬の間にほとんどの木が霜で枯れてしまいましたので、2013年5月にリンゴの木をもう一度一から植え直しました。今度は、リンゴの木は冬をよく持ちこたえ、芽がたくさん出ています。発育のいい木を見て、みんなは本当にとっても喜んでいました。去年の植樹の後で、私達は名前を簡単な木切れに書いて、記念としてリンゴの木に付けました。しかし、その間にその名札が風雨で風化してしまいました。それで、上長部の方々がありがたいことにもう一度新しい名札を用意してくれました。短い

儀式で、彼らは名を呼ばれた者に新しい名札を渡しました。綺麗な名札は太い枝を斜めに切りとったものです。その後で、名札がリンゴの木にネジで取り付けられました。



運よく、何も書かれていない名札もありました。ですから、ドイツのロベルト・ボッシュ財団に名札をひとつあげることにしました。ボッシュ財団は遠野まごころネットに20万ユーロ（現在約2千万円）の寄付をしました。現在、その寄付で大槌では「一つ屋根の下」の名で、木工工房が建てられています。そして、ボッシュ財団がすでに二回（去年と今年）絆・ベルリンの「翼・プロジェクト」を1万ユーロで援助しています。

上長部では青森県の八戸から来た江渡茂彦さん（上の写真の向かって左から1番目）が私達に加わりました。彼は去年の紅玉植樹をインターネットで知り、今年の始めに私、絆・ベルリンと連絡を取りました。農家ではありませんが、各国の果樹をたくさん試験的に育てています。ドイツのリンゴの木もサワーチェリーの木も育てています。今日は、酸果桜桃（シャッテンモレロー種のサワーチェリー）の苗を2本持って来てくれたので、私達とリンゴのそばに植えました。



江渡さんは今までいろいろな植樹に参加しました。たとえば、東北では唯一の国際交流員までいる六ヶ所村の小学校はじめ村内の公共施設に苗木を贈呈して植えています。六ヶ所村の隣に日本原燃の六ヶ所再処理工場があります。彼は「絆・果樹園」が日独の友好関係を深めることが出来ると確信しているので、この理念に魅了されています。その理由から、ミュンヘンと姉妹都市の札幌にも郊外の3つの農園に木を植えています。そして、去年に江渡さんは岩手と群馬、八戸の日独協会の集まりにも参加して、ドイツの果物事情について聞いてきました。

- ベルリン・ハウス

植樹後、上長部の方々にベルリン・ハウスで我々は本当に心から歓迎されました。この間に、上長部と絆・ベルリンは、長年の友情で結ばれています。

2011年9月に、絆・ベルリンは清掃作業の手伝いをするために、はじめて三陸海岸を訪れました。津波が日常の生活にもたらした影響についてもよく知ることができ、ベルリンから引き続き復興への支援ができるようにしたいという思いが生まれました。私たちはNPO遠野まごころネット（これから以下にTMN略します）を通して、上長部の住民の人たちがその土地ではじまっている復興の出発点として公民館を建設したいという希望を聞きました。

ベルリンに帰って、私たちはこのプロジェクトをベルリン・独日協会に紹介しましたが、そちらでも同様にこの持続的なプロジェクトに理解してもらうことができて、必要な資金について多くの援助をいただきました。東日本大震災被災地の復興のために、ベルリン・独日協会は2011年3月からたくさんの寄付金が集め、上長部のプロジェクトに全部で10万ユーロを提供しました。

TMNは建築主です。絆ベルリンはこのプロジェクトをコーディネートしています。また、私たちは建築家としてヨルク・グッチョウさんをメンバーに迎えて、設計を好意により引き受けてもらったばかりではなく、多くの資材の援助もいただきました。

2012年の4月には鍬入れの儀式、6月には棟上げ式が行われました。12月には、鍬入れをしてからわずか九ヶ月で、完成を祝うことができました。その日に新しい公民館は「ベルリーナー・ハウス」と名付けられました。

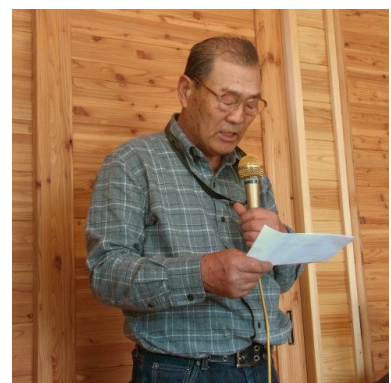
この日のお昼に、上長部のお母様方が私たちを食事に招待しました。福沢先生と私の短いスピーチの後で、上長部自治会の会長の菅野 隆さんと上長部自治会の副会長の小泉 正喜さん、一般社団法人「上長部の郷」の菅野恵二郎代表がドイツからの助けに謝辞を述べました。ベルリーナー・ハウスは上長部の社会生活に中心的なところになりましたと言いました。ここでいろいろな住民の活動や催し物が行われています。いろいろなグループ（女性、子供、上長部の郷など）が定例の集合を行っています。そして、コンサートを開いています。午前、女性が「お茶っこ会」で、お茶を飲みながら、一緒に仕立て物をしています。そして、公民館では全民はいつでも大歓迎です。



菅野 隆さん



小泉 正喜さん



菅野恵二郎さん

菅野さんは津波で息子を亡くしました。災害後、彼は家を失った人30人を被害を免れた自分の家に泊め、賄いをしました。現在、菅野さんは「上長部の郷」とベルリーナー・ハウスで数々の活動を企画しています。

美味しい会食後、去年の春と同様に、絆・ベルリンがコンサートを行いました。フラウケ・トゥヴォルクが歌い、フランク・バイヤーがギターをひきました。遠野から来た高木香織さんはピアノで歌手の伴奏をしました（右の写真）。



本当に素晴らしいコンサートでした。聴衆が盛んな拍手を送りました。皆さんはコンサートを楽しんで、新しい公民館は幸福な空気に包まれていました。日本人がドイツ人と一緒に「ベルリンの空気（Berliner Luft）」のリフレインを歌いました。コンサートの後は上長部の方々が「奇跡の一本松」などを歌いました。最後は、近い将来に再会を期して別れました。



ベルリン・ハウスのすぐ近くに、もう1つ建物が建てられていました。その「結い」と呼ばれているハウスでは上長部に収穫した農産物や木工品が販売されているだけでなく、お茶を飲むこともできます。



結い・ハウス



ベルリン・ハウスの前にお別れの写真

- ボランティア活動

ベルリン・ハウスの使用記録によると、今まで何度もボランティアの人が上長部で働いています。たいてい、農業の仕事です。

4月29日に、絆・グループが再び上長部へ行き、今度ボランティア活動をしました。絆メンバーのウェルナーさんはトラクターで畑に長さの100メートルの畝を立てました。

その畝はフイルで覆いをしました。フイルに穴をあけ、穴に花を移植しました。



3) 気仙町福伏と要谷漁湾（陸前高田市）

4月25日と27日、28日に「陸前高田カモメネット」のサポートセンターに行き、福伏（ふっぷし）という小さい村でボランティア活動をしました。25日に、カモメネットの責任者の後藤さんが我々に福伏の現状を報告しました。福伏と隣にある要谷漁湾は陸前高田の南方にあります。上長部から約3キロメートル離れた村は高さの23メートルの津波で被災しました。



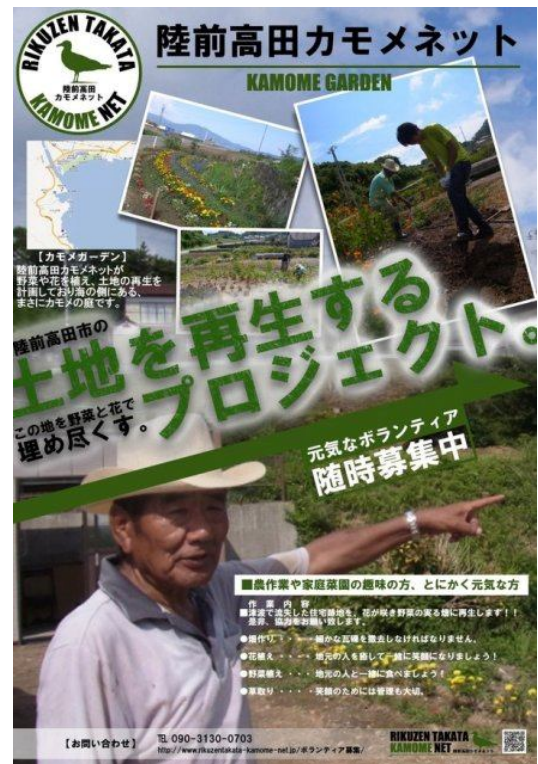
その地方では瓦礫の中から800人の死体を収容しました。地元の火葬場の容量がありませんでしたので、たくさんの死体は千葉県に運ばれなければなりませんでした。

ここも高さの10～12メートルの防潮の建設が予定されています。昔は防潮堤の高さは6メートルでした。水害地域の下部では土が2, 3メートル以上の高さに積み上げた後で、大きな公園を造るそうです。

水害地域の上部は去年まで瓦礫を撤去し、そして、ボランティアの人が花壇を造っていました。ガラスや金属、木の破片からの傷害の危険を防止するために、植栽前に10～20センチ・メートルの腐植土が積み上げられました。

ボランティアの人が全国津々浦々（東京や名古屋、盛岡、福島など）から来て、花を植えました。たとえば、2013年の秋に、埼玉県行田市の大学生が東京・渋谷駅の前でお金を集めて、チューリップの球根を2000個以上買って、次の週の1日目に植えました。

今までに、チューリップ14000本と芝桜500本が植えられました。大多数の花が美しい幾何学模様に植えられています。たとえば、「頑張ってください」の花文字を描いた花壇もハートのような形に植えた花壇も作られました。



4月の下旬に、カモメ・ガーデンは花盛りで、くっきりと鮮やかです。花の絵を生かした植え方が本当に見所です。

なにより、ボランティアの人の目標は花が咲いたときに地元の方の笑顔も満開になることです。被災地の人々は、花模様に少し癒されていると思います。

そして、たくさんのボランティアの人が花壇を見にまた来ているので、ボランティアの人たちと被災地の人たちとの心のつながりが広がっていると思います。

私達も花を買って、小さい花壇を造りました。

初日は前のグループが造った花壇の整備をしました。雑草を引き抜き、花が密に育っている箇所では間引きして他に移しました。



4) 大船渡

5 度目の今回も、我々の拠点は大船渡市でした。三日間、大船渡市の福祉の里センターに宿泊しました。ゴールデンウィークのために、その間中ずっと福祉の里センターに泊まることができませんでした。

運よく、我々は4月25日から5月1日まで長洞仮設住宅に無料で泊らせてもらいました。もちろん、最後の日に、絆・ベルリンは長洞仮設住宅の自治会に寄付を渡しました。

女性は空き住宅に、男性は長洞仮設集会所に泊まりました。それに、我々は長洞・コミュニティセンターの台所で夕食を自分で作ることができました。

- 新しい魚市場

大船渡の復興が著しく進歩しています。大船渡に滞在中、最も重要な行事は港にある新しい魚市場の開設でした。「水産のまち」と呼ばれている大船渡では水産業は主要な経済の柱です。



2014年4月24日に、魚市場の完成式典が現地で行われました。4月30日に、完全操業が始まりました。新しい魚市場は元の魚市場の北側に建てられました。延べ床面積は元の市場の約2倍大となる計1万9千平方メートルです。そして、従来と比較すると岸壁延長は約1・5倍になりました。最新鋭の高度衛生、鮮度管理機能を備えています。魚市場は本当に復興のシンボルです。だから、私たちは、魚市場が大船渡市の経済発展の原動力になることを望んでいます。

- 交通のインフラストラクチャー

レクリエーションの交通のインフラストラクチャーも進んでいます。東日本大震災前に、JR 東日本の大船渡線は一ノ関駅から気仙沼市を経由して大船渡市の盛駅を結んでいました。しかし、沿岸部を走行するこの区間は津波で破壊されたので、大船渡線は気仙沼から大船渡まで不通となっています。

JR 東日本は暫定策として、路盤の崩落を免れた線路敷地をバス専用道に改築しました。2013 年 3 月 2 日に、仮復旧として、BRT の運行が開始されました。BRT は「bus rapid transit (バス・ラピッド・トランジット)」の略称です。気仙沼～盛の間は 45 キロぐらいですが、その時代には交差点のない道路の長さは 10 キロメートルだけでした。

1 年後、交差点のないバス専用道が 25 キロメートルに延長されたので、両都市の連絡がなおよくなっています。また、海沿いの道では交通量が緩和されています。

同じ時、2014 年 4 月に私鉄の三陸鉄道南リアス線も延長されました。吉浜駅から釜石駅までの路線区が再開されました。それで、今から大船渡の盛駅から釜石まで直行することができます。私鉄はクウェートの支援で気動車を 3 台購入することができました。



大船渡の盛駅（左: 三陸鉄道南リアス線、右: BRT の終端停留所写真）

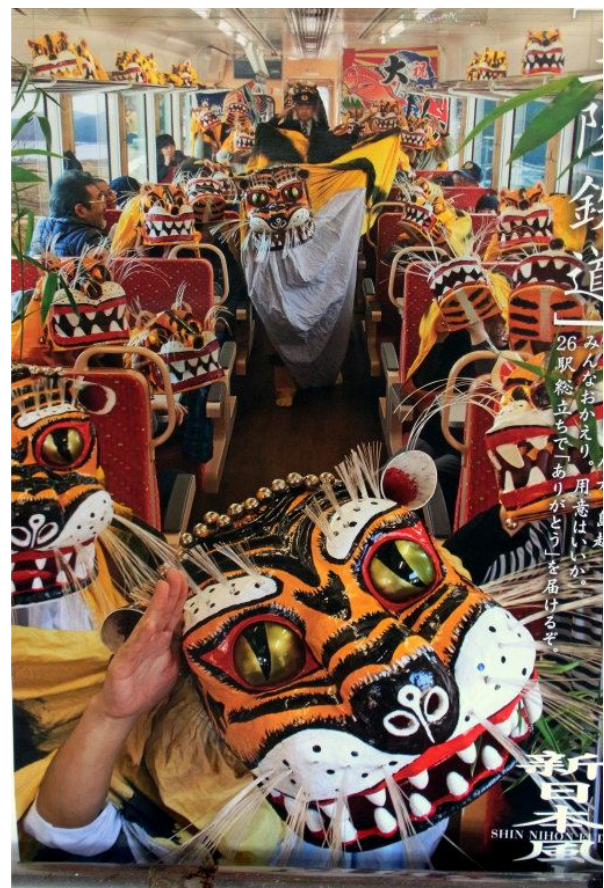
4 月 26 日に、唐丹駅の前に津波の後で初めての桜祭り行なわれました。その日に、我々も大船渡から大槌までへの途次に唐丹駅の祭りに立ち寄りしました。

新しい 4 月 6 日に区間の開通式中に、関東から来た中学生が唐丹駅の駅前に桜の木を 31 本植えました。



吉浜駅から釜石駅までの保線区の開通式

鉄道による交通を復活させるために、私鉄会社は多くのことを行っています。たとえば、特別運動、鉄道の祭りなどがあります。そして、海岸地域の観光事業として週末と休日などにお座敷列車を走らせています。



- 仮設住宅、住宅建設

現在の大船渡市人口は、38,616人となり、津波以前に比べ約2,000人減少しました。死亡者340人、いまだ80人の行方がわからないそうです。約1,600人の住民は大船渡の地域を引き払いました。

50カ所の小高い区域では市街化が始まり、今までに約1,650人の居住者が37カ所の仮設住宅に住んでいます（データ保護のために、正確な数はわかりません）。今から1年前は、2,500人の居住者が仮設住宅に住んでいました。そして、3分の1の居住者が仮設住宅から新しい自宅か公営住宅に引っ越すことができました。

今後36カ所の仮設住宅の閉鎖が予定されています。ほんの数年後には、1つしか仮設住宅が残っていない予定です。それは長洞です。大船渡地域ではいちばん大きい仮設住宅は交通に便利な所です。そして、新しい公民館もあります。現在、そこに300人が住んでいます。

市政によると、段階的に閉鎖していく仮設住宅の残っている居住者が長洞仮設住宅に少しずつ移住させられるそうです。社会的問題が避けられないと思います。

4月28日に我々は長洞仮設住宅の隣にある菜園でボランティア活動をしました。女性はまめを植え、男性は去年組み立てられたビニールハウスを直しました。



4月30日に、絆・ベルリンは長洞仮設住宅の公民館でコンサートを開催しました。フラウケさんはドイツや日本、ロシア語の歌を歌いました。5月1日に同じところでさよならパーティーがありました。

5) 大槌

- 神森ドロノキ・プロジェクト

4月26日と27日に朝早く大槌に行き、神森ドロノキの緑化運動に参加しました。近年、このドロの木は自然林を探索しながら、かろうじて確保しているのが現状だそうです。ドロの木は本当に絶滅寸前だそうです。

去年の3月に、「臼澤鹿子踊保存会（U K K）」が釜石のドロノ木山に行き、希少な自生の雌木のドロノキから種子を採種しました。5月から大槌・伝承館の近くの畑に約3700本の苗木を育てました。今年の4月に、その苗木の植林が予定されていました。



ドロノキの育種園（左:2013年7月、右: 10月）

ドロノキの経済的利益はわずかですが、ドロノキの木材は別の面で必要です。ドロノキから鹿子踊りの仮面の白い頭髪を作っています。日本人は古来、その「カンナガラ」と呼ばれる頭髪を、外界と触れあう“心のアンテナ”と考えてきました。踊り手が振り乱すたてがみで神様と連絡をとるそうです。



次世代に続く伝統文化と土芸能との安定的存続を目指すのがこのプロジェクトの目的です。復興の要素の一つだと思います。被災した人々にとっては、伝統文化は大切な頼みの綱です。郷土芸能と伝統文化は、人間と人間、自然、地域とのつながりの中で存在するので、まさに、復興の要素の一つです。

収穫できるまでに成熟期間が30～40年なので、長期計画です。プロジェクトは本当に子々孫々のためです。希望の種です。現在の不安定な社会情勢では、特に長期的な計画に着手することで、被災者により良き将来への希望と新しい勇気を与えます。

植林プロジェクトは伝統文化の目標だけでなく、生態的目標も経済的目標もあります。「絆森」はもっと大きな基本計画の中心部です。基本計画は収益事業と

観光事業のプロジェクトも含んでいます。観光事業の復興ために、ハイキングコース、自然歩道、公園、果樹園、山小屋などを作る予定です。

大槌鹿子踊
神の森どろのき
プロジェクト
植樹祭

日時:平成26年4月27日(日)
 時間:午前10時～12時(雨天決行)
 場所:新山(町有林)
 *開式
 *修祓式
 *記念植樹
 *大槌鹿子踊合同大群舞
 *閉式

信濃国分寺より技術指導で来町
未来に繋ぐ鹿子魂
 連絡先: 東梅英夫 090-6227-3623
 mail: usuzawa.denshoukan@gmail.com



津波以前は生態系のバランスがくずれていました。それで、サステナブルな森の自然の回復することが必要です。プロジェクト対象地域の新山高原は鬱蒼と生い茂った緑豊かな森でしたが、1970年代から北上山系開発の名の下に森を伐採し、牛の放牧が行われました。ケンタッキーブルーグラスがたくさん植えられました。そ

の結果、保水力が減少し、周辺の中間湿原の範囲も年々狭くなっている状況にあります。ひどい雨の後で、小川が奔流し、大地を浸食しています。また別の所では、水源が枯渇しています。

プロジェクトは、過去の過ちを修正するための最初のステップです。プロジェクトの波及効果として、広葉樹林を植林することにより森林の公益的機能が高まることも多いに期待されております。

「非生産的」森の大切さを自覚することが必要です。多様な機能ですが、長期的・持続可能な発展は短絡的経済効果を越えています。

山口 幸夫さん（現職：日本社会事業大学 社会事業研究所 特任准教授）は我々にどろのきプロジェクトの理念とめざすものを教えてくれました。可能な持続発展と生活改善のために、新しい森林管理システムを創造しなければなりません。多様な森林管理（針広混交林化や広葉樹林化など）が必要です。キーワードは非皆伐施業（partial cutting）や天然更新施業です。例は「岩泉町のふるさと創生事業（ふるさとの森推進委員会）」と「長倉地区久保川イーハトーブ自然再生事業」です。

大槌のドロノキ・プロジェクトは「臼澤鹿子踊保存会」の会長の東梅英夫さんの先導で組織されました。遠野まごころネットもプロジェクトを援助しています。

2012年10月に、TMNのメンバーは我々にドロノキ・プロジェクトを初めて教えてくれました。2013年5月に、東梅英夫さんの案内で植林地を初めて視察しました。それから彼と連絡をとっています。

4月26日に、植樹の準備作業をしました。去年に「翼・プロジェクト」の枠内でベルリンへ来た高校生も二人（写真で最前側、右から1と2番目の人）参加しました。



我々はその翌日に「ドロの木」の苗木を植える場所の枯れ木などを掃除しました。



同じ時、大槌市民が翌日の祭りの催される野外舞踏場の地ならしをし、掃除しました。



4月27日の10時に、神主が祝詞をあげ、150人ほどの参加者が神妙に聞いていました。そして、厳粛な雰囲気、記念銘板を揭幕しました。銘板に「大槌鹿子踊 - 神の森ドロノ木植樹記念」の文字が入れられました。



神主は祝詞をあげた



記念銘板揭幕



除幕後、植樹会場では町内の鹿子踊全5団体（臼澤鹿子踊、金澤鹿子踊、上京鹿子踊、吉里吉里鹿子舞、徳並鹿子踊）が初めて一堂に会して群舞を披露、新たな伝統のスタートを祝いました。400年の歴史の中で初めて、5つの鹿子踊が一緒に踊りました。

その後、我々は皆さんと一緒に300本のドロコキの苗木を準備した穴に植えました。



報道関係者と放送記者もたくさん集まりました。それで、いろいろな記者会見をしました。新聞記事が3つ以上掲載されました。



植樹の後は全員が大槌の臼澤伝承館の昼食に招かれました。昼食の前に、いろいろなあいさつがありました。そして、植樹の無事な終了を祝って乾杯をしました。



東梅さん



福澤先生と私



山口さん

東梅さんは、ドロノキ・プロジェクトの発案から実現までの長かったが迷うことのなかった道のりについて、報告しました。山口さんは、地域の環境と経済におけるこのプロジェクトの意味について話しました。そして、福澤先生と私は、植林ボランティアの協力者など、ドイツからのこれからも続く支援について確認しました。



スピーチの後で、私は絆・ベルリンを代表して東梅さんに10万円の寄付を直接手渡しました。



- 「ひとつ屋根の下」

4月26日の午後に、大槌のコミュニティーセンター・プロジェクトの進捗状況を見に行きました。建築工事では、「ひとつ屋根の下」をモットーに、「大槌たすけあいセンター」も障害者向けの兼木工工房も建てられています。建物群の建築主はTMNです。将来的に、その外の建物の建設も計画されています。

たすけあいセンターの目標は大槌の社会生活に新しい中心的なところを設けることです。津波後に、火災が広がりました。津波と火災で、10人に1人が亡くなりました。全人口約1万5千人のうち死者・行方不明者は合わせて1353人でした。3585戸の住宅は全壊または半壊しました。住宅の60パーセント以上なので、現在もたくさんの仮設住宅がありました。それで、今でも、たくさんの住民が仮設住宅にすんでいます。

コミュニティーの再生と産業・雇用の創出が重要な課題となっています。建物を建てるだけでなく、共同体の結束を固くすることが大切です。たすけあいセンターは、被災された皆さんが気軽に集え、働ける場所を提供するため企画されたものです。カフェや手芸教室、英語やIIT講座などのコミュニティプログラムと、レストランや食品加工施設、工房などの「なりわい」プログラムを提供する施設です。レストランでは郷土料理を、売店では隣の兼木工工房で作った郷土芸能などが販売される予定です。

2012年の秋に、私たちはTMNを通して、大槌の人たちがその土地ではじまる復興の出発点としてたすけあいセンターを建設したいという希望を聞きました。ベルリンに帰って、私たちはこのプロジェクトをドイツのロベルト・ボッシュ財団に紹介しました。いろいろな調査の後で、ボッシュ財団は新しいコミュニティーセンターに全部で20万ユーロを提供することを決めました。絆ベルリンは仲介に貢献しました。



大槌の新しいコミュニティーセンター

プロジェクトの実現は簡単ではありませんでした。予定された立地では土地のインフラ問題があったので、新しい立地を選ばなければなりませんでした。それで、工事開始が2012年の春から昨年7月6日に遅れてしまいました。

さらに、その間に他のスポンサーが多額の寄付をしました。「日本たばこ産業株式会社（JT Foundation）」の約8500万円の寄付で、大槌たすけあいセンターが最初の計画よりもっと大きく建てることができました。そして、TMNのリクエストで、ボッシュ財団は新たな20万ユーロの寄付で、障害者向けの兼木工工房も今建てられています。

4月26日に建築現場を見にいったとき、公民館は完成に近かったです。最後の内装工事をしていました。（その後、内装工事も終わり、5月22日にオープニングセレモニーが行われた。）

木造平屋建ての建物は、津波で被害を受けた杉材を使っています。一部は陸前高田「上長部の郷」から来た杉材です。床面積約560平方メートルです。

センターの前には、2基の風車が設置されています。センターの電力の大半は、この風車を使った風力発電でまかなっています。あつてはほしくありませんが、今後万が一災害が起こり、電力の供給が絶えた場合、センターは電力の確保された避難所にもなります。



4月26日に、木工工房の現場では、すでにコンクリートの基礎スラブが終わっていました。



5月16日に屋根工事が始まりました。本当に、建設はどんどん進んでいます。及川さんによると8月には竣工できるそうです。



5) 遠野

-メガソーラー・プロジェクト

大災害とりわけ福島第一原発事故を考慮すると、代替エネルギーの発展及び継続が大変な任務だと思われます。

去年の夏に、福澤先生と私はベルリンの「Photovolt Development Partners GmbH (PVDP (太陽光発電会社))」とコンタクトを取りました。PVDPは数年間にいろいろな国では大きな太陽エネルギー利用発電所を成功させてきました。会社の活動の重点は総合計画と資金繰りです。日本でも、長崎の沖合の島に大きな太陽光発電所のプロジェクトも計画中です。

津波の被災地の三陸地方でメガソーラーを建設する可能性を探るために、社長のゲルステマン氏を福澤先生と一緒に訪ねました。適した土地さえ用意してくれるなら、原則的に実現が可能だと言う答えをいただきました。パネル設置に必要な傾斜度15度までの土地が50ヘクタールあれば、十分、少なくとも30ヘクタール、そして土地は賃貸か購入、どちらにしても20年は必要との事です。それを聞いて、TMNの及川さんが遠野の地域を調べて、適地を見付けました。候補となった土地は、もともと牧場でしたが、福島の放射能汚染のために牧場としては使われなくなってしまったそうです。

4月23日の午前、福澤先生と私は遠野へTMNとPVD Pの社員に会いに行きました。

まずは発電所予定地の視察に出かけました。ベルリンからはPVD P社長のゲルスデマン氏とプロジェクト・マネージャー、ロシアの投資会社の社長のグルホフ氏、さらに東京から所長の村上さんが来ました。及川さんと通訳、エンジニアと一緒に6人の一行が土地を視察しました。PVD Pの社員によるとその土地はメガソーラーのためのすべての条件を満たしているとのことでした。

午後の1時から遠野市の市役所で副市長さんと関係するセクションの課長さんたちが5人ほど出席した会合が開かれました。事業企画書にそって説明されました。



もしも使用予定地が約2000ヘクタールになると、事業規模1000億円です。これは、アジアのもっとも大きな太陽エネルギー利用発電所の中のひとつに数えられることになるそうです。資金はPVD Pが責任を持って集め、施行その他も自分たちでやるとのことでした。土地の使用許認可取得に協力してほしいというのが要望でした。建築は4年間かかるそうです。そのソーラー発電所では仕事場作業者の総数が約300人になるそうです。

地主の代表は前向きに検討すると答えました。市側は静観的態度をとりました。それで、計画は今のところ未決定です。絆・ベルリンはそのプロジェクトに賛同していく予定です。

- 翼・プロジェクト

去年の8月に、絆・ベルリンは翼・プロジェクトの枠内で、岩手県から5人の高校生をベルリンに招待しました。TMNと協力したプロジェクトはボッシュ財団から1万ユーロで財政援助を受けました。被災地を離れて、ドイツ社会を体験し、同世代の若者と1週間過ごし、異文化経験をすることによって、将来の地域復興・活性化に役立たせてほしいと願うからです。

翼・プロジェクト2013は大成功だったので、ボッシュ財団が翼・プロジェクト2014に新たに1万ユーロの資金援助をくれました。

そして、TMNが4月初めに岩手県のメディアを使って、公募を開始しました。

4月17日の応募申込期限の後で、TMNが1次審査（書類審査）しました。19人が応募し、16人の女子高校生と3人の男子高校生が書類選考で選ばれました。

今年は去年より英語の基礎知識は不可欠な前提でした。

4月29日、第二回「翼」独日高校生交流プロジェクトの参加者面接が遠野市民センターで行われました。



この日、会場に来ていただいたのは、岩手県10市町村から応募してくださった高校生が19名でした。主催者・絆・ベルリンと共催者・TMNの役員8名で面接させていただきました。面接者の19人はそれぞれ15分間の面接を受けました。



自己紹介の後で、応募動機などについての質問しました。最後の5分間には、英語で簡単な質問をした。面接の後、私たちはひとりひとり数字で評価しました。1は合格、2は保留、3は不合格です。このようにして、約7時間後に、4人の女子高校生と2人の男子高校生が選ばれました。19人の応募者の中から6人を選ばなければならなかったもので、本当に、とても難しい選択でした！

その6人の高校生は今年の7月30日から8月7日までベルリンを訪問します。一番の目的はドイツ人の高校生との交流です。ドイツ人家庭での6日間ホームステイ、ベルリンの市内史跡観光、ドレスデン訪問、駐独日本大使館の訪問と2泊3日のワークキャンプが予定されています。

そして、2日間は日本人の高校生はドイツ人の高校生と一緒にボランティア活動に参加します。8月1日にドイツ森林保護団体青年部の自然保護塔の周りに植樹運動が計画されています。そして、8月4日に私たちは「ベルリン・ターフェル（食べ物配布NPO）」を訪問し、そこで約3時間ボランティア活動を予定しています。

「翼」の主催は絆・ベルリンで、共催はNPO法人TMNで、さらに後援は岩手県教育委員会と駐独日本大使館です。

ちなみに、6月に高校生がTMNからプロジェクトのオリエンテーションを受けました。



選ばれた高校生 （TMN・本部での初めのオリエンテーション）

そして、長部のベルリンハウスをメインに視察を行い、新しい区長さんからお話しも伺いました。

6) レジюме

東日本大震災の三重災害（地震・津波・原発事故）後に、絆・ベルリンが今まで5度目にボランティア活動をしました。2011年の秋はどちらを向いても、たくさんの瓦礫が山のように積み重ねられていました。それで、2011年も2012年も主として肉体労働的な活動（側溝掃除など）をしました。

しかし、2013年からは、同じ場所でさまざま復興を感じさせる光景が見られるようになりました。訪問したところのほとんどで清掃作業は完了しており、大規模な再構築が開始されました。

復興が次のステップに移るにつれて、我々が現地でできることは本当に少なくなっています。専門家の仕事がいちだんと重要になっています。それは労働市場についてのプラスの要素です。しかし、経済的な問題はそう簡単に解決できないと思います。たとえば、復興が長期間かかるので、過疎化がまだ問題です。そして、工事材料と費用復興の高騰も大問題になるそうです。

我々は2013年からの活動の特徴は、肉体労働的な活動だけではなく、コンサート、高校生交換、農業の仕事、緑化運動などの活動もしました。

たとえば、去年の秋に同じ場所で初めて田植えをしたとき、私たちの心は希望で満たされていました。

そして、今年、神森ドロノキの緑化運動に参加しました。生態系のバランスが部分的に崩れてしまうので、たとえば「ドロノキ」のような再植林のプロジェクトは、復興ばかりでなく、過去の過ちを修正するための最初のステップだと思います。より良き未来に向かって、復興は大きなチャンスだと考えています。

総括して言えば、被害地ではどちらを向いても大きな仕事が行われていますが、目標に合致した援助がまだ数年間先まで必要だということです。

現在、コミュニティの復活も大事です。地域住民と被災地で働いているNPOによると新たな地域コミュニティや産業・雇用の創出拠点となるセンターが被災地の随所で最も重要なことだそうです。それで、コミュニティの復活について、「大槌たすけあいセンター」と「ベルリン・ハウス」のようなプロジェクトの実現は本当に喜ばしいことです。

コミュニティの復活は行政措置で処理することはできません。コミュニティの復活は被災した人々やNPO、ボランティアなどと一緒に進められていきます。

我々は東北の住民とNPOの皆さんと共同で復興の仕事をしました。それは、本当に印象的な体験でした。本質的なものとそうでないものとを区別することを学びました。

2011年から2014年までのボランティア活動を通じて日本とドイツの友情の絆がしだいに強まったと思います。

東北滞在中、私たちは継続的な支援が役立つと聞かされています。別れに臨んで、地元の方からは感謝の言葉が多かったです。被災した人々もNPOのスタッフも「連続が気力を与える」と言いました。

来年から、絆・ベルリンググループでのボランティア活動及び旅行の予定はありません。それにもかかわりなく、我々の中の数人は、もう一度東北へ行きたいと思っています。たとえば、妻と私は今年の11月にまた大槌へ行くつもりです。



長洞仮設住宅の公民館で行なわれたさよならパーティー

絆・ベルリンは将来もTMNと親しい関係を保ち、復興についてのいろいろなプロジェクトに協力していけると確信しています。
さらに、8月に、岩手県からくる高校生はドイツ人の高校生と交流し、両国家間をつなぐ橋となると期待しています。

フランク・ブローゼ

ベルリン、2014年7月24日

参加者・リスト

1. ヨーロッパに住んでいる絆のメンバーたち

名前	職業	国籍	参加回数
Frank Beyer	元会社マネージャー	ドイツ人	3
Dr. Frank Brose	地質学者	ドイツ人	5（副団長）
Dr. 福沢啓臣	元ベルリン自由大学日本学准教授	日本人	5（団長）
Werner Hähnel	エンジニア	ドイツ人	1
Marianne Karbe	翻訳家、フリーライター	ドイツ人	1
Frauke Twork	元オペラ歌手	ドイツ人	2
Dr.山田ボヒネック頼子	元ベルリン自由大学日本学准教授、 NPOヨーロッパ日本語教育学研究所 代表	日本人	4

2. 日本に住んでいる絆のメンバーたち

廣瀬芙美子	元職員、年金生活者	日本人	5
村松庄次郎	元会社員、年金生活者	日本人	4
村瀬靖昌	翻訳家	日本人	4
戸谷美津子	フリーライター	日本人	3
土屋恵子	フリーライター	日本人	2

3. 大船渡に住んでいる世話人

今野みつこ	介護・ソーシャルワーカー	日本人	5
今野定志	民生委員、年金者	日本人	5